

オホ

四月十三日を以て生まれ、皇學を高木守衛に受けて勤王の志厚かつた。克敏、元治元年叔父源藏に従つて上洛し、不破富太郎等と共に長藩の爲に策動する所があり、八月十四日金澤に歸つて、野口芹吉・高木守衛と共に久徳傳兵衛の家に會し、入京以後の形勢を報じたが、その夜藩は命じて克敏を自家に禁錮し、

恐いで玉井勳解由の邸に移され、十月十九日切腹を命ぜられた。享年廿二。明治二年十月藩前罪を宥し、三年十一月祭料をその家に給し、廿四年九月靖國神社に合祀せられ、同年十二月正五位を贈られた。

オホノギカツヒロ 大野木克寛 通稱左衛門。伴人・新藏。父は克明。初め新知三百石を受けて大小將となり、享保十一年遺知千六百五十石を襲ぎ、小松城番・奏者番に歴任し、寶曆四年歿した。享年五十六。雜觀談叢一名稱錄の著がある。

オホノギカツマサ 大野木克正 通稱源藏、幼名外三郎。初諱克昌。人持組大野木克誠の三子で、十二歳の時前田慶寧の側小姓となり、新たに祿百石を受け、後累進して百石を加へ、大小將組頭となつた。克正、元治元年前田慶寧に従つて上洛したが、その伴うた甥大野木仲三郎が他藩と交り國事に奔走するを放任したから、歸郷の途八月十六日小松に捕はれ、西尾半人の家に拘留の後、十月十九日能登島に流刑を命ぜられた。子源太郎後克亦連座して流に當てられたが、船向幼なるを以て暫く一類預とせられた。明治元年三月大赦令により、藩克正の前罪を宥し、二年十月士族に復し、原祿三分の一を給せられ

區長に任ぜられ、十三年三月一日歿。年五十四。大正六年十一月十八日特旨を以て從五位を追贈せられた。

オホノコウ 大野港 河北潟の排水口なる大野川が、石川郡大野に至つて海に注ぐ所に在る。暗礁砂洲はないが、大船を入れることを得ぬ。

オホノゴウ 大野郷 加賀郡の古郷名。於保乃と訓ずる。日本靈異記に、越前國加賀郡大野郷畝田村の人横江臣成刀自女があり、仁和元年紀に、加賀國加賀郡大野郷の人道今古があり、延喜式に加賀郡大野湊神社がある。然るに和名抄には之を石川郡に列してゐるのは誤である。但し今は郡界の變遷によつて石川郡に屬してゐる。

オホノゴウホウコウキ 大野郷訪古遊記一冊。津田鳳卿の著。石川郡大野郷内を散策して、古蹟を野翁に尋ね、之を記録に徴して考證したもので、漢文を以て記されてゐる。天保十一年二月成つた。

オホノゴリ 大野嶽 ↓シラウヲ 白魚。オホノサダトシ 大野定職 通稱織江・仁兵衛。元文四年養父彦徳の百五十人扶持を襲ぎ、御馬廻で高岡町奉行となつたが、安永六年九月六百六十石に引直して組外御番頭となり、御先筒頭・御持筒頭を經、寛政四年三月致仕して智石と號し、二十人扶持を受け、同年十二月廿八日七十一歳を以て歿した。

オホノシユク 大野宿 石川郡大野をいふ。應安二年十二月得江八郎次郎季員申軍忠狀に、『今年九月七日御敵攻寄宮腰之間、同日九日當所御發向之時御共仕處、凶徒御引退大

和名抄石川郡(加賀郡の誤)大野郷の地である。源平盛衰記に、『源氏は安宅後よりおちて、今濱・藤塚・小河濱・介部・雙河打過ぎて、大野莊に陣を取る。』とあり、又天龍寺文書建武三年八月二日宮樺介宛所のものに、『臨川寺領加賀國大野莊領家職事云々』と見えて臨川寺領であつた。その他白山宮莊嚴講中記録嘉祿元年十一月に、『大野莊地面代生西入道云々。』の事があり、白山記に『佐那武、大野莊有之。』ともある。後世亦大野莊がある。

オホノシヨウ 大野庄 石川郡に屬する。藩政時代では保古・太郎山・黒田・下安原・専光寺・専光寺新・北笹塚・古保・袋山・中野・鷲森・櫻田・示野・示野中・二寺・赤土・松・觀音堂・曹正寺・寺中・畝田・藤江・戸水・無量寺・大野・五郎島・宮腰(町)の廿七ヶ所を含んでゐた。

オホノジヨウ 大野城 ↓ダケジヨウ 嶽城。オホノシヨウユ 大野講油 石川郡大野に産する講油は、藩政の時粟ヶ崎に製する所と共に、最も良品と稱せられた。その由來は詳かでないが、元和中直江屋伊兵衛が初めて造つたとするを通説とする。弘化・嘉永の頃は醸造者六十餘戸に上り、淺黄屋津兵衛の製するものは、藩侯の用に供せられた。

オホノジンノジヨウ 大野甚丞 太田但馬の臣。慶長五年大聖寺の役に首一つを獲、淺井殿でも奮闘して、前田利長より二百石、但馬より二百石を賜はり、本知とも八百石となり、七年但馬の滅後は利長に仕へて更に二百石を加増せられたが、十年頓死し、子甚之丞

オホノスケエモン 大野助右衛門 初名茂右衛門。明和六年養父伊右衛門尚忠の遺知百三十石を襲ぎ、御廣式御用達となり、天明五年五十石を加へ、東岩瀬代官・能美郡代官となり、二年五月十七日七十二歳で歿した。

オホノセキ 大野堰 金澤五枚町の町尻と傳馬町の入口との間にある堰をいふ。尿川の流をせき入れるもので、川下大野一郷の水田を養ふ故の稱である。其の用水川を鬼川といふ。

オホノタノモノスケ 大野頼母助 ↓オホノウマザエモン 大野馬左衛門。オホノチセキ 大野智石 初名主税。土井利勝に仕へて千七百石を領し、家老役であつたが、寛文十一年隠居し、延寶三年利勝の子帯刀が幼にして死し、その家斷絶するを以て、前田綱紀に仕へて傳五十人扶持を受け、人持隠居並を以て遇せられ、智石と號し、元祿十四年歿した。孫彦忠亦綱紀から百五十人扶持を得、御馬廻に班して、子孫相繼いだ。この彦忠から第四代に仁兵衛定職があつて、隠居の後亦智石と號した。

オホノチヨウキユウ 大野長久 七尾の俳人。細流軒と號し、初め貞室の門から出で、後に晩山の風を慕ひ、元祿十三年勳文と相携へて京に上つた。此の時長久年六十餘にして俳風を刊行した。この外續廣葉の著があると傳へられる。元祿十五年正月二十日歿。遺

三三三